

莊嚴に司教区50周年を記念

司教区の使命を確認し新たな一步を踏み出す



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行人 末吉卓也
1部60円年間共1100円

道標

04年10月10日～05年10月29日
「聖体の年」
【司教区昇格五十周年】
小教区が活性化し
教区が一つとなるように



50年の感謝と希望の船出のミサ

教区初の終身助祭に 桃蘭淳一郎師と久保俊弘師

一九五五年二月二十五日、教皇ピオ十二世は鹿兒島を教区から司教区へ昇格させた。この昇格を司教区創立と位置づけた鹿兒島教区は、今年の二月二十七日、カテドラル・ザビエル

「キリストこそわたしたちの希望」をテーマにした鹿兒島司教区五十周年記念ミサは、九月十九日(月)鹿兒島カテドラルに七百人を超える信者が参列して莊嚴にさげられた。記念ミサではこれからの教区の進路を示すようにベトナムからの神学生ティエンさんの助祭・司祭候補者認定式と教区初の終身助祭叙階式があったほか、教区功労者の表彰もあり聖堂内は喜びに満たされた。

ている。

これまでに教区内全小教区を巡る「聖体一日礼拝リレー」、侍者の集いや召命の祈りの運動を含む「司祭召命祈願月間」(四月と十月)、WYDへの青年派遣を実施。

また年表「鹿兒島司教区五十年宣教の歩み」と創刊から四十年を超える鹿兒島カトリック教区報の縮刷版を編集発行した。さらに司牧体制見直しのために終身助祭制度の導入とベトナム人神学生の受け入れ、信徒奉仕者の養成を決め、その実現に向かって歩みを進

糸永司教説教で明示 司教区の使命と今後の歩み

五十周年記念ミサで説教した糸永真一司教は、この日を教区の新しい船出の時とし、司教区の使命を確認するとともに今後の歩みに示唆を与えた。

司教区の使命は第二バチカン公会議で示された「福音宣教」にあると明言した司教は、価値観が多様

化した現代社会では、識別のために教会の教えをしつかり学ぶ必要があるとした。また教区の今後の歩みにかかわる教区の司牧体制の抜本的な見直しについても次のように言及した。

「今のままでは教区内に司祭がいらない小教区ができる恐れがある。そこでベトナム出身の教区司祭の養成に乗り出す。第二に叙階の秘跡の一端を構成する助祭がいらない鹿兒島に終身助祭制を導入し、叙階の秘跡の役割とその恵みの一部が欠けているところを補い、教区の司牧体制を充実強化する。第三に、教区の発展に信徒の働きが欠かせないことから、信徒奉仕者を育てることとし、差し当たり宣教師の養成を目指していく」

【二面に説教要旨】
九月二十日(火)、全司祭集会在教区本部で開かれた。議題は、次の通り。
①終身助祭及び信徒奉仕者の養成に関する教区の方針
②終身助祭のあり方
③宣教師について
糸永司教は、全司祭に教区報九月号で公にされた終身助祭及び信徒奉仕者の養成方針の確実な理解と信徒への説明を要請した。

①については、終身助祭、信徒奉仕者それぞれの養成担当である竹山師、永山師から案が示された。②については、助祭は司祭にではなく、司教に直属するが、住居のある小教区共同体に参加し、ミサへの奉仕など通常の助祭の役割を果たすことなどを確認した。③については、公式には「朗読奉仕者」と呼ばれている「レクトール」を鹿兒島教区では「朗読奉仕者」とともに以前のように「宣教師」という呼称を用いること、任期も特別に定められないことなどが示された。



①教区初の終身助祭が誕生
②司教から表彰状を渡される功労者

めることにした。

十九日午前十時からさげられた記念ミサでは、このベトナム人神学生の助祭・司祭候補者認定式と終身助祭叙階式があったほか、信徒奉仕者の養成にもつながるとの思いから功労者九十九人(内出席六十八人)を表彰した。

教区功労者として表彰されたのは小教区での長年にわたる地道な働きが評価され小教区から推薦された信徒八十七人と教区司祭の親十二人で、司教からそれ

ぞれ表彰状、感謝状、教皇祝福が手渡された。

鹿兒島教区初の終身助祭に叙階されたのは桃蘭淳一郎さん(鴨池教会所属・七八歳)と久保俊弘さん(谷山教会所属・七三歳)。二人は今年二月の五十周年開始ミサで終身助祭候補者として認定を受けた後、終身助祭養成委員会の養成を受けてこの日を迎えた。教区では将来、各小教区に一人の助祭を任命できるように養成を続けたいとしている。

全国典礼担当者会議

全国典礼担当者会議が九月七日(水)から三日間、長野県軽井沢の御聖体の宣教クララ修道会軽井沢修道院で開かれ、鹿兒島からは教区典礼委員の末吉神父(ザビエル教会)が出席した。

主な議題は子どもの典礼司牧で、横浜教区の田代

全司祭集会

九月二十日(火)、全司祭集会在教区本部で開かれた。

議題は、次の通り。
①終身助祭及び信徒奉仕者の養成に関する教区の方針
②終身助祭のあり方
③宣教師について

糸永司教は、全司祭に教区報九月号で公にされた終身助祭及び信徒奉仕者の養成方針の確実な理解と信徒への説明を要請した。

田代師は日曜日の典礼が勝負であることを、長い司牧生活の中での体験を交えながら話した。意見交換の中では次のような現状や意見が示された。
今は信仰のない子どもが多い。日曜以外は信仰生活がなく、ミサ以外に宗教の体験がない。家庭祭壇の祝別が少なくなってきた。今は教会でも携帯でゲームをやっている。ゆるしの秘跡を受ける前に家庭で和解の喜びを体験したり、人間関係の中で、ゆるしの体験をすることが大切。子どもがゆるしの秘跡を受けるときは、親も一緒に受けること。良心の究明では神様や人を喜ばせることをいっくつできたかを考えさせる。侍者の集いで、子どもたちの中に大人を入れると雰囲気がいよい。

養成担当である竹山師、永山師から案が示された。②については、助祭は司祭にではなく、司教に直属するが、住居のある小教区共同体に参加し、ミサへの奉仕など通常の助祭の役割を果たすことなどを確認した。③については、公式には「朗読奉仕者」と呼ばれている「レクトール」を鹿兒島教区では「朗読奉仕者」とともに以前のように「宣教師」という呼称を用いること、任期も特別に定められないことなどが示された。

はじめに
教区内各地からお集まりの皆さん、
わたしたちは今日、鹿児島司教区の五十周年を記念するために此処、鹿児島カテドラルに集まりました。

カテドラル、すなわち司教座教会は、ご覧のとおり「司教座」が置かれた教会であり、そして司教座はキリストのお定めにより、使徒たちの後継者である教区司教がそこにいて教区を司牧していることによるのです。従って、カテドラルは、第二バチカン公會議が言うように、教区内諸教会の母なる教会であり、教区における典礼の中心です。その意味で、司教区五十周年は鹿児島カテドラルの五十周年の記念でもあるのです。

わたしたちはこのカテドラルを六年前、ザビエル渡来四百五十年祭のミニメントとして、ローマ聖座や外国からの支援に頼らず、わたしたちの力で建てました。同じように、今日の鹿児島司教区も、いままも働いておられるザビエル様をはじめ、鹿児島司教区を仰いで生きて働いた歴代のすべての司祭、修道士、信徒が作り上げた教会です。このミサの終わりに百人ばかりの信徒功労者の表彰式がありますが、彼らは一部の代表的な方々であって、実は鹿児島司教区という共同体に結ばれたすべての信徒の皆さんが、司教・司祭・修道士とともに教区の功労者であります。

しかし、鹿児島司教区を作り上げたのはわたしたちだけではありません。実はイエス様ご自身が聖霊とともに、わたしたちを通して偉大な救いの業を成し遂げてくださったのです。その意味で、司教区五十周年は主のみ業の五十年であり、恵みの五十年でもあるのです。ですから、今日、わたしたちは、お互いの苦勞をねぎらいかつ讃えながら、五十周年の喜びを分かち合うと同時に、教区を支え導いてくださったイエス様に、そして三位一体の神様に、限りない感謝をささげ、その栄光を讃えましょう。今日のミサはまさに感謝の祭



二〇〇五年九月十九日

鹿児島司教区50周年記念ミサ

糸永真一司教説教(要旨)

①一つは司教区の使命
は何であるかを確認すること、そして
②もう一つは教区の宣
教体制の抜本的な見直しを
行うことです。

(1) 司教区の使命

まず、教区の使命とは何なのかを確認しておかなければなりません。なぜなら、現在の教区の実態を見る限り、わたしたちは何をなすべきかについて迷いがあり、確信と責任感が薄いように感じられます。例えば、教区の刷新を議題にした昨年の教区評議会においては、問題

言葉ではありません。聖書全体を通して示された神のご計画、すなわち、世界の創造主であり救い主である神のご計画であって、この神のご計画を体現しておられるのがキリストご自身です。キリストは父なる神の生き写し、活きた神のことばであって、この秘められた神のご計画を明らかにして実現されるお方です。ここで、今日読まれた聖パウロの書簡を想起しましょう。

「御子は見えない神の生き写し、すべての創られたものに先立って生まれた方。それは、天にあるものも、

(2) 教区の司牧体制の抜本的な見直し
第二の課題は、教区の司牧体制を抜本的に見直すことです。

その理由は、現在の教区の指導体制は、一部を除いて、老朽化して限界にきているように感じるからです。特に、司祭団が高齢化し、また減少して、この難しい時代の教会をリードしていくには力不足であるように思われます。そこで、老朽化した教区の指導体制を一新するために、新しい力を導入し、新しいリーダーを育てなければなりません。

そのための象徴的な計画は、このミサで行われる三つの儀式に関連する次の計画です。

①一つはベトナム出身の教区司祭の養成です。

司祭がいなければミサがありません。ミサがなければ教会もありません。ところが教区では司祭の高齢化が進み、その人数も減少して、まもなく司祭のいない小教区が出てきそうな状況があります。この危機を乗り越えるために、教区は司祭召命の多いベトナムから神学生を募集することにしました。ですが、最初にこの期待にこたえてくださったのが、今日、助祭・司祭候補者の指針として、わたしはすでに「信徒のための信仰生活指針」を公表しています。この指針を今一度取り上げて参考にしてほしいと思います。そうすることを通して、教区全体が真に宣教する共同体としてその実りを挙げることにしたいと思います。

②次は、終身助祭の導入です。

なぜ終身助祭の導入かと言いますと、教会をリードするための叙階の秘跡は、助祭、司祭、司教の三つの段階を構成しているのですが、鹿児島教区には司教・司祭は一応いるけれども、助祭がないのです。助祭がないという事は、叙階の秘跡による役割とその恵みが一部欠けていることを意味します。従って、教区の司牧体制を充実強化するためには、どうしても終身助祭の養成と配置が必要だということになります。

③第三は「信徒奉仕者」の養成です。

ミサの終わりに信徒功労者の表彰式が行われますが、これは信徒奉仕者の協力の重要性を思い出すための表彰式でもあります。先刻申し上げましたとおり、これからの教区の発展は信徒の働きにかかっています。中でも、共同体の各部署でリーダーとなって奉仕する「宣教奉仕者」や「教会奉仕者」の養成

の重要性が明らかになりました。教区報で発表しように、差し当たっては「宣教奉仕者」の養成を目指します。一人でも多くの信徒の皆さんが宣教奉仕者になつてくださるよう期待したいと思います。

2 希望の船出

今日の福音で、主はペトロに「沖に漕ぎ出せ」と命じました。ペトロは「一晩中働いて何も獲れませんでした。しかし、お言葉ですからもう一度網を降ろしてみよう」とこたえて、そのとおりにしますと、網も破れんばかりの大魚でした。今日、わたしたちも、「福音を宣べ伝えよ」という主のお言葉ですから、勇氣と希望をもって立ち上がりましょう。

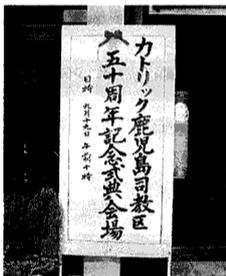
確かにわたしたちの力は小さいかもしれませんが、しかし主は、この小さなわたしたちの働きに実りを与えてくださいます。その意味でわたしたちの働きには力があるのです。わたしたちはまた、一人ひとりばらばらではありません。わたしたちはキリストのからだであり、聖霊の息吹によって一つにされているのです。一致の力を信じなければなりません。皆さん、「キリストこそわたしたちの希望」です。これからさきとられる聖体のいけにえに、わたしたちとわたしたちの決意をあわせて御父にささげましょう。そして、聖体を分かち合い、希望をもって出発しましょう。

特集

新しい息吹を感じた日

―新たな船出の瞬間―

教区50周年



参列者たち
九月十九日(月)、教区五十周年記念ミサがさざげられた鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂には、ミサ開始の一時以上前から大勢の信徒が足を運び始めた。

祭、修道者。何よりも今し方、船で鹿兒島港に着いたばかりの大島、徳之島からの参列者たち。初めて新しいカテドラルに、そして新しい本部を訪れたという人たちも大勢だった。遠隔地から来た信徒、司

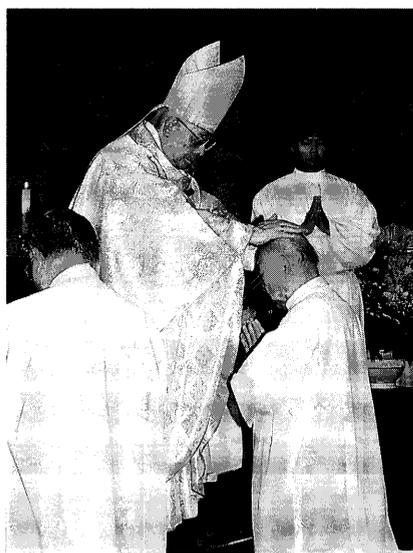
を記念する機会に、「小教区の活性化と教区の一体化を図ろうとする」教区の狙いにこたえようとする皆の思いの表れだったのかもしれない。

終身助祭誕生

ミサには教区で働く司祭たちのうち三十人が参加し、糸永司教を囲んで教区の新しい宣教司牧体制の核ともなるベトナム人神学生ティエンさんの助祭・司祭候補者認定式と終身助祭の叙階式を行った。

終身助祭誕生

特に緊張した面持ちで入堂したのは二人の受階者桃蘭淳一郎さん(鴨池)と久保俊弘さん(谷山)。その表情が一段と険しくなっ



司教から授けられる受階者

たのは諸聖人の連願が始まってから。そしてその重圧から解き放たれたように表情に喜びが見られるようになったのは、糸永司教から授けられた後だった。教区初めての終身助祭誕生に、聖堂内は喜びに満ち溢れた。

誕生したばかりの終身助祭二人は助祭の衣を身にまとった後、かいがいしくミサの奉仕に奔走した。年齢を重ねた二人がまるで初々しい青年のように働く姿には、教区に吹いた新しい息吹を感じずにはいられなかった。

そして聖体拝領。二人ともまず一番身近について支えてくれた家族へ、ご聖

体を受けたが、桃蘭助祭は孫の国沢匠馬君と将伸君に初聖体として授けるといふ幸運に恵まれた。

教区功労者表彰
ミサの終わりにには小教

終身助祭 助祭・司祭候補者の横顔

終身助祭

◎ベトロ 桃蘭淳一郎 1927年9月14日生まれ(78歳)

1945年鹿兒島県立第二中学校卒業後、通信省へ。その後九州電気通信局管内の諸施設に無線技術者として勤め、1984年退職、その後N T T関連会社に六年間勤務した。現在は鴨池教会でカテキスタ、聖歌隊指導者として奉仕している。

◎パウロ 久保俊弘 1931年11月3日生まれ(73歳)

1954年岐阜県大卒業後、薬局勤務を経て1959年から92年まで県内公立高校の理科教員として働く。退職後5年間「三宝園」に勤務した後、現在は薬局に勤務し、教誨師として活躍している。

助祭・司祭候補者

◎ガブリエル・ジュオン・ワン・クオク・ティエン 1966年3月4日生まれ(39歳)

ファンティエト教区(ベトナム)出身。1994年シトー会神学校卒業、1999年ホーチミン大学社会学部卒業。Thanh Linh教会(ファンティエト教区)で5年間働く。その間、青年とレジオ・マリエの指導、母の会、結婚と家庭を担当。



けられた。これは二月二十七日(日)カテドラルからスタートした聖体一日礼拝リレーを記録した「小教区巡回記念ノート」。教区内二十八小教区を巡って、九月十八日(日)再びゴールのカテドラルに帰ってきたものだ。

ノートを開いてみると大きな教会、小さな教会それぞれに工夫を凝らした礼拝が実施されたのがよく伝わってくる。礼拝の様子を写真に収めたもの、礼拝に関するミーティングの様子から記録したもの、そして当日の様子、参列者の感想など温かいものばかり。中には次の礼拝当番教会へ「皆さんのために祈っています」とメッセージを添えている小教区もある。

記念の式典に足を運んだ方々から「感動した」「来てよかった」の声が聞かれたのは、半年をかけて続けられたこの礼拝の効用がそこに表れたと思えて仕方がなかった。

「おめでとう」と「ありがとう」

そして益々の活躍を祈念して

教区功労者表彰を受けた方々

表彰者(敬称略)

田辺一男、大村登志園、海蔵幸子、川口節子、河村泰義、池端ミチ子(以上)、始良、林久徳、武川眞澄、千葉幸男、高崎昭子(以上)、ザビエル、迫田久光、鯨島みつ子(以上)、加世田、蘭辰巳、池亀サダ、市村和子(以上)、種子島、杉山忠一、平義治、桃園淳一郎、大茂文則、木佐貫悦子(以上)、鴨池、古木和三(玉里)、戸

田一美、四位幸雄(以上、出書)、真田島国夫、浜崎敏行(以上、阿久根)、吉原久子、尚鈴子、田島操、田島和子、寿頼之助、寿よき子、上久保恵、川元芳子(以上、鹿屋)、永井尚武、大坪涼子、前原松枝(以上、和泊)、星村文雄、花田新吉、松田辰雄、伊集院忠三郎、大江真三郎、濱田静雄、嘉一成(以上、瀬留)、押川遥、牧園忠義、平三国(以上、大熊)、郡



山由紀、永田博、染川皆子、村田正男、村田久恵、平雅子(以上、聖心)、恵沢彦二、西牟田幹男、徳永平、栄三千代、恵鐵雄、恵貞満(以上、小宿)、池田ミキ、橋口スナ、久保ウメ、河野レイ(以

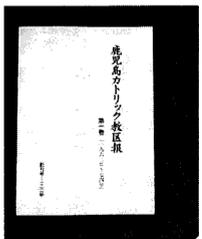
上、古田町)、岩元春清、村山フジエ、有川定、盛ツ子子、村田英治、里ヒロ、荒垣千枝、丸田光郎、中田夏乃、中山ヨシ(以上、笠利)、池上聖行(母間)、雨水新一、追立清徳、岩井正一、徳重敏寛、永山直人、永井義則、渡美一、鈴木昭三、太田勇一郎、安榮晃、久保俊弘(以上、谷山)、重野都与久、内田清(以上、吉野)、高橋義晴(大口)

感謝状(敬称略)

永山シヲ、郡山セツ、中野道子、寝占五郎、節子、木村ミツエ、小隈得蔵・ミエ、浜崎笑子、泉紫朗・京子、末吉康子

ミサ後は教会一階ホールと中庭で祝賀会が催された。誕生したばかりの終身助祭と海を越えてやってき

申込は教区本部まで 教区報縮刷版



教区創立五十周年を記念した教区では、この機会に創刊以来四十年を超える「鹿兒島カトリック教区報」の縮刷版(A4)版を発行した。この縮刷版には一九六二年創刊号から二〇〇四年十二月号までが四分冊でまとめられている。小教区には寄贈されるが、数に限りはあるものの希望者にも分けたい。希望者には配布

できるのは百五十部で、申込順。また希望者には縮刷版発行協力特別献金をお願いする。申込は教区本部(Ⅷ〇九九―二二六一五―一〇)まで。

私のような小さい者を助祭にして頂けましたのは司教様のご推挙と教育して下さいました神父様方のお陰と日々感謝しておりますが、実は神様が召し出して下さったものと主を賛美し感謝いたしました。

奄美の迫害で神父様は追い出されてしまいました。中二の時にフェリックス(後のレイ司教様)、オーバン神父様がいらつしやうて、公教要理は石神神学生(後の司教様)が教えて下さり、イエズス様の素晴らしさが分かり、高三の時、



しわぶきひとつしなないしじまの中に諸聖人の連願の歌声が響きました。そこにひれ伏すとき、ヨルダン川の川底に身を沈め、「自分を無にして僕の身分となり、肉となられた」(フィリピン二の七) キリストを見る思いでした。

糸永司教の温かい接手、「この人の上に聖霊を注いで下さい。奉仕の務めを忠実に果たすために、恵みの七つの賜物で強められますように」司教の一段と力強い祈

大島高校五十年記念誌に「今一番大事なことは神様を知る事」という文を投稿しました。神父様になりたいたいという思いもありました。結局、結婚の道を選びました。

高校の教員になった時は、折に触れてクリスマスマスの話、ご復活の話など主の愛のことをしゃべっていました。定年後、老人ホームの寮長になった時、しばらくして有馬神父様から「もう神様の話を入園者にしてほしい頃じゃないか」と言われて、毎日の朝礼と週一回の講話、時にはご老人たちの部屋を訪れて、希望者に教会の話をしていまし

終身助祭叙階の恵みを受けて

谷山教会 久保俊弘

鴨池教会 桃菌淳一郎

り、カトリック教会の使徒伝承が、一人の終身助祭を世に現した瞬間でした。

一九二七年九月十四日、台湾の一隅で平凡な海軍軍人の家に男の子が生まれました。私です。一九五二年の同じその日、はるかカナダの地で一人の日本人がキリストの司祭に叙階されました。糸永司教さまです。

その日は奇しくも「十字架称賛の日」でした。それから数十年後、この鹿児島において一人はキリストの使徒として、一人は終身助祭として神の前に出会うのです。「天の下のすべてが出来事には定められた時



(結婚の見直しの念、今年五月の教皇庁説教師カンタラメッサ神父様の長崎での黙想会、大神学校での十日間の神学講座、五日間の黙想指導というろんな神父様を通して教育して下さいました。

今思うことは聖霊による刷新にかかわってから、聖書を好きになり、ごミサも毎日行きたくなり、ご聖体の前で長く座れるようになったことも主のお恵みです。

天の御父は皆が喜んで生きている姿を望んでいます。すべてのことにいつも喜び感謝して祈っていると主は苦しい悪い事をも善いものに変えて下さいますので祈り合ってくださいませう。

がある。神はすべての出来事、その時期にかなったものとして美しく造った(コヘレト三の一)誰も知ることができないことが、神の計画の中で実現に向けて進んでいたのです。皆さまのたくさんの祈りと祝福のうちに、限りない恵みをいただきます。

洗礼を受けたとき、「何ぞ天を仰ぎつつ立てるや」(使一の一)の情景と「我は活くるも主のために活き



お孫さんにご聖体を

死するも主のために死すればなり(ローマ十四の八)のことは強く頭に残りました。神の前に何ほどのこともできません。しかし、土の器(コリント四の七)に輝く恵みをいただきまし

たみすばらしい器ではなく、注がれた光を見つめて励みたいと思えます。これからも支えて下さいますよう、よろしくお願いいたします。神に感謝。

思い出の一日

記念すべき9月19日



共同体の歴史は主に二つの視点で振り返ることができる。一つは共同体メンバーを軸に彼らが主体的にどのようか考え、行動してきたか、他は共同体の指導者を軸に彼がどのような指針を示して共同体を導いてきたか、である。しかし、この二つが単純かつ明白な形で分離してではなく、両者が対話と共同によって共に創造するものが歴史であり、その中でどちらが顕著に現れているか、である。

鹿児島司教区50年宣教の歩みを発行

ザビエル教会主任司祭 永山幸弘

宣教体制を整えた。彼らが信者とともに活発な宣教活動を行い、物的にも精神的にも枯渇していた人々の心をつかみ、驚くべき勢いで信者が増加した。

一九七〇(現在(糸永司教在任))はどちらかというと内的な宣教態勢の整備、例えば信徒が宣教するための教理的・霊的養成、財政基盤の確立、底辺からの信者共同体(班・小教区)の連帯、地理的に本土と大島諸島と分離する教区の一

体化、使徒職団体の教区的連携、具体的な宣教活動の実践(例えば信者倍增運動)、教区司祭の育成、などが挙げられる。この期間大きな教区的行事、教区創立五十周年(一九七七)、宣教再開百周年(一九九一)、一九九二、ザビエル渡来四五〇年祭(一九九九年)など、九)を行い、記念事業としてカテドラルと教区本部をつくり上げたのは五十年の歩みの見事な証である。

以上のような教区の歩みを辿りながら編集したのがこのほど発行された「鹿児島司教区五十年宣教の歩み」である。この歩みを刻んで次の五十年の成長に繋がれば、と願っている。

神学養成講座で奉仕への決意新たに 教区から19人が参加し学習

信徒奉仕者の養成プログラムの一環として参加が勧められた神学養成講座が八月二十五日から九月三日まで福岡サン・スルピス大神学院で行われ、鹿児島教区からも十九人の信徒が参加し、総勢四十人名が十日間で六十時間の充実した講義で、神学、哲学、聖書学、宗教学など多くのことを学んだ。



教区創立五十周年を迎えた鹿児島教区は司牧体制の強化のために終身助祭制の導入と同時に信徒奉仕者の養成を急務と考え、そのプログラム作りを進めている。また教区では福岡サン・スルピス大神学院であったこの神学講座を養成の基礎部分として位置づけ、信徒に広く参加を呼びかけている。

同講座は大神学院が臨

床・パストラル研修センターとの協賛で行っているもので、一九九九年から実施されており、二年間で計百二十時間で神学全般について講義が行われる。

<KABAYAN SEKSIYON>
"Huwag kang Makikiapid"

Ang pang-anim ay ang "Huwag kang Makikiapid". Para sa atin, ano ang ibig sabihin nito? Alam natin na sa simula pa lang ang Diyos ay pag-ibig at sa sarili niya siya ay nabubuhay sa misteryo ng pansariling pagmamahal. Sa kanyang kawangis ay nilikha niya ang sangkatauhan, nilikha niya ang tao, lalaki at babae, at inilagay niya sa puso ng tao ang kakayahang at tungkulin ng pag-ibig at pakikisama. Pinagpala niya ang mga ito at sinabi: "Maging mabunga kayo at magparami". Ang kasarian ng lalaki at babae ay nagkakabisang sa lahat ng aspeto ng tao na kaisa ng kanyang katawan at kaluluwa. At ito'y may kinalalamanan tungkol sa pagtingin, ang kakayahang at magmahal at lumikha ng bagong buhay sa pamamagitan ng pagkakaisa ng lalaki at babae suod sa plano ng Maylika. Binigyan ng Diyos ang lalaki at babae ng parehong pansariling dangal. Ibinigyan ng Diyos ang kalayaan na pumili ng kanyang makakasama sa buhay sa pamamagitan ng pagpapakasal: "Dahil dito, iwan ng lalaki ang kanyang ama at ina, at pipisan sa kanyang maybuhay, at sila'y magiging isang laman". Sa pamamagitan ng kasarian ng lalaki at babae ay ibinibigay nila ang kanilang sarili sa bawat isa sa tama ng gawain at ito'y para lang sa may mga asawa, at hindi isang bagay na pangangailangan ng laman lamang, kundi ginagawang may pag-ibig na nangagaling sa puso ng bawat isa. Ang kasarian ay regalo ng Diyos na dapat gamitin sa tamang pamamaraan. Kaya ang mag-asawa habang nabubuhay pa ay dapat maging tapat sa bawat isa hanggang sila ay mamatay. Kaya itinuturo ng pang-anim na kautusan na "Huwag kang makikiapid", dahil ang pakikipag-ibig ay tumutukoy sa katakusan sa buhay ng mag-asawa. Ang isang mag-asawa, lalaki man o babae na nakipagtalik sa iba ay gumagawa ng pakikiapid, at ito'y kinondena ni Kristo na ang pakikiapid ay isang pagnanasang laman, hindi pag-ibig. Kaya ang pang-anim na utos at sa Bagong Tipan ay ipinagbabawal ang pakikiapid sa mga mag-asawa at ang gumagawa ng pakikiapid ay sumisira sa kanyang sinumpaanan at ito'y isang kasalanan na nagiging sanhi ng paghihiwalay ng mag-asawa at ang nakakaranas ng sakit at kalungkutan ay ang mga anak. Kaya mga kababayan ingatan ninyo ang inyong kasal. Maging bukas ang inyong mga puso sa bawat isa para maiwasan ang pakikiapid at paghihiwalay.

召命月に思う

小宿教会主任司祭 木村敏彦

若者と召命
人生をどう生きるか。
人生の意味は。幸せとは何か。突き詰めて考えると、他者のために何が出来るか、自己を他者に与えることにつながる。若者がボランティアに向かうのはこのためだ。若者には、特有の「純粋さ」がある。
二十二歳の頃、教会(大阪)の青年会で聖書の分かち合いが始まった。聖書のみ言葉にふれながら、次第に自分の召命を考えるようになった。そして福岡

の神学校に入ることになる。その後、同じ聖書の分かち合いのメンバーの一人が、東京の神学校に入学したことを知った。現在彼は、大阪教区司祭として働いている。
「私に従いたい人は自分を捨て、自分の十字架を背負って従いなさい」(マタイ十六・二四)。大神学校在学中、このみ言葉を真摯に黙想し、よく祈った。イエスは人々の救いのため、「神と人との仲介者」として、ご自分を「いけにえと

して捧げられた」。司祭は「イエスに従う」ものであり、「すべてを捨てる」必要がある。徹底した自己贈与が要求される。司祭は、教会に奉仕する使命を帯びており、また司祭は、キリストの代理者として、キリストの権威のもとで、人類の救済の業を継続することにほかならない。教皇ヨハネ・パウロ二世は、使徒的勧告で、次のように述べている。
「…叙階の秘跡の塗油によつて、聖霊は、司祭を新しい特別のしかたでキリストにかたどり、一致させ、牧者であるキリストの愛で養成し、強めます。そして、

教区青年を派遣 今回のWYD

八月十六日から二十一日までドイツのケルンで行われたワールドユースデー(テーマ「わたしたちはイエスを拝みに来たのです」)には、全世界百五十か国から百万人以上の若者が集まった。日本からも公式団体だけで三百人が参加、その

中には教区民のバックアップを受けた当教区九人の若者と石田師の姿があった。大会中は、巡礼の旅にふさわしく様々な困難もあつたようで、交通渋滞による移動時間の辛さ、配られる食事が足りなかったり、体を洗うことや洗濯も満足にできなかったりしたようだが、それぞれが祈りのうちに同じ信仰を持つ仲間とともにすばらしい体験をし、多くのものを得てきたようだ。以下、参加者の感想の一部を紹介する。

訃報

- 鴨池教会 新福紫乃
ケルン大聖堂巡礼から教皇ベネディクト十六世の歓迎式典、そして教皇ミサまでの道のりは世界の人々が一気に集まっていたので、移動も大変で、何時間もかかってしまうという状況が連日のように続き、朝早く出発し、帰ってくるのは夜遅くという日々が何日も続き、精神的に辛い状況が続くうちに、私は心の中にあることを思うようになり、祈りたい、という気持ちで、それは、日本では感じたことのないほどの強い気持ちでした。なぜそう
- 大山重光神父
一九八五年四月からしばらくの間、教区で働いた福岡教区の大山重光神父(門司港教会)が九月七日(水)、心臓疾患のため帰天した。七十五歳。
- 大田イチ子修道女
長崎純心聖母会川内修道院の大田イチ子修道女が九月七日(水)入院先の病院で帰天した。福岡県田川市出身、七十歳。
- 郡山セツさん
郡山健次郎神父のご母堂セツさんは長い間、闘病されてきたが九月二十八日(水)昼頃、安らかに帰天された。九十四歳。

10月

〔十字架の使徒会祈りの意向〕 小教区の活性化

- 2日(日) 年間第二十七主日
- 4日(火) サンタマリア神父叙階記念日(一九七〇年)
- 5日(水) 牧山田一神父叙階記念日(一九六一年)
- 9日(日) 年間第二十八主日
- 10日(月) 福岡英雄神父叙階記念日(一九八九年)
- 10日(月) 古仁屋教会献堂記念日(一九六七年)
- 13日(木) 西阿室教会献堂記念日(一九六七年)
- 13日(木) カタリナ永俊帰天(二六四九年)
- 16日(日) 年間第二十九主日
- 17日(月) 教区司祭会・16時・司教館
- 17日(月) レデンプトル会例会
- 18日(火) 聖ルカ福音記者
- 18日(火) 内野洋平神父霊名
- 23日(日) コンベントゥス・教区本部・10時
- 23日(日) 年間第三十主日 世界宣教の日(献金)
- 「世界宣教の日」は、すべての人に宣教の心呼び起こさせること、世界の福音化のために、霊的物的援助をはじめ宣教者たちの交流を各国の教会間で推進することを目的としています。この日の献金は、各国からローマ教皇庁に集められ、世界中の宣教地に援助金として送られます。日本の教会は、いまだに海外から多くの援助を受けていますが、経済的に恵まれない国々の宣教活動をさらに支援できるように成長していきたいものです。
- 24日(月) 大水如安神父命日(一九九四年)
- 25日(火) 東研神父叙階記念日(一九六四年)
- 27日(木) 大松正弘神父霊名(聖ジェラルド)
- 28日(金) 聖シモン 聖ユダ使徒
- 29日(土) 聖体の年閉幕
- 29日(土) 青年の集い
- 30日(日) 年間第三十一主日
- 31日(月) ミタマヤ神父命日(一九八四年)

11月

- 1日(火) 諸聖人
- 1日(火) 芦花部教会献堂記念日(一九一九年)
- 2日(水) 百合の寮開設(一九五九年)
- 2日(水) 死者の日

信徒の使命を実感

神学養成講座参加者感想

ザビエル 山田敏子

この十日間、講師の方々に専門的で深い洞察、知識の一部を提供していただけたことは、「日々生活しながら感じていることへ関心を掘り下げていくように」との招きをいただいた恵みのときでした。これからの自らの課題は、追われる日々にあつて日常生活の中で感じたことをもつと意識化し、考え、どれだけ神との親しさを生きていけるかです。

小宿 久保正子

全てにおいて、学問も生活も神との交わりつながりの中で生かされている。旧約と新約も一つで、中に隠されている神の愛を発見していくときこんなにも楽しいものだと感じました。

文芸

俳句 (思川俳句会作品)

純心学園 田村鏡子

司祭逝き祭壇の百合と咲く

(評) 人柄を表白し、「そとと咲く」の捉え方がよい。

阿久根 中津濱フサエ

ロザリオの祈りも涼し秋の暮

羽ばたきとこまでも飛ぶの鳥一羽

鹿児島 徳永ノブ子

ざわざわと波打ち渡る青田風

(評) 「青田風」がよい。

田の稲穂日色つきて秋進む

鹿児島 本城 愛

朝もやの入江に消ゆる漁り舟

よいかということを選び、旧約の大切さ、旧約と新約の関係、捉え方などを順を追って学ぶうちに、私の頭の中に断片的にあつたものが次々とつながり校正されていきました。神の命にあずかるものとしていかに生きるべきかこれからはなすべきことが少し見えてきたように思えます。

加世田 川口 茂

十教科六十時間の講義は、私の理解の中にある宗教分野を想像以上に広く深く押し広げていただきました。二十教科百二十時間を二年で終了するこの講座を最後まで受講し終えたいと強く思いました。講師陣の研究を学習できるお恵みをわくわくしながら来年の夏まで楽しみにしています。

聖心 松本五十鈴

宗教の理解の仕方、人生の意義を改めて考えさせられ、神様と親しい交わりを持つ為にはどうすれば

青年の集い

分かち合い

10月29日(土) 17時 研修の家

WYD報告会

10月30日(日) 14時 ザビエル教会

※ミサか聖体賛美式も行います。

始良教会 郡山 勇

聖書を深く見て、なぜイエス様が十字架にかけられたのか、なぜ神は人を創造されたのか、聖書と現代など様々なことが分かったと思う。現代においてのイエス様、そのイエス様はどこにおられるのか、と現代を舞台に進められる授業、人に思想など、私にとつて必要なことを学ぶことができました。

吉野教会 橋本嘉奈子

この十日間、講義に参加し、聞く、聴く、書くことで一生懸命で、多分帰りが遅くなりました。

福音的なハイジ

友人の勧めで「ハイジ」を読みました。シュピリ

作、矢川澄子訳、福音館書店から出版されたちよつと分厚いけれど読みやすい本です。小さなハイジは出会った人を幸せにします。ハイジはとても健気です。まっすぐな心で人間を動物を自然を見つめます。早くに両親と死別して寂しい身の上にもかかわらず自分の身の上を呪ったり、悲しんだりしません。山羊番のペーターのおばあさんを喜ばせようと、必死で読み書きを覚えます。目の

声

見えないおばあさんは聖書を読んでもらうのが唯一の楽しみなのです。いろいろな不幸な出来事があつて村人に心を固く閉ざしてしまつたおじいさんには、放蕩息子の話

「どうやつたらいいのかわからなくなつたら、何もかも神様にお話するのよ。神様は何もかも承知で一番いいと思うことをして下さる。ただしばらくじつと我慢して逃げずにいればね」

雄大なアルプスの大自然の中に珠玉の言葉「聖句」がちりばめられています。まっすぐな心で神様からのメッセージを受け止めたい。喜びに溢れて私は本を閉じました。

ザビエル教会信徒

ルルド アシジを巡って

渡 孝也

「郡山神父様と行く巡礼の旅 ルルド・ローマ・アシジ九日間」を知り、妻とともに参加いたしました。信者十八人と未信者二人の一行は八月二十二日夕刻成田空港を発ち、翌日の昼前、小雨模様のルルドに着きました。

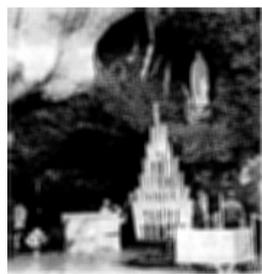
この時期のルルドの日暮れは遅く、午後九時前、聖母行列が始まりました。行列に加わっている病人は

家族やボランティア達の優しさ愛情に支えられ、間断なく続くアベマリアの歌とロザリオの祈りに励まされてか、穏やかな表情の中に精神的な高揚感を漂わせているように見えました。

その光景は美しく心を洗われる思いでした。

未信者の私は行列に向けていたカメラを収め、行列の一員となることにし、目の前を通り過ぎていくイタリア人達の行列に入りま

した。行列のコースの四分の三程進んだ所で続けて二回灯が消えてしまいました。一回目は隣のイタリア人男性から、二回目は行列を見送っていた婦人に火を灯してもらいロザリオの



教会前の広場に辿り着きました。異国の男女二人の方と言葉のないコミュニケーションが図れたこと、異国の人々と肩を並べて歩みを共にしたことにホノボノとした満ち足りたものを覚え、これがルルドなんだと心の中で呟いていました。

ローマではサン・ピエトロ大聖堂、バチカン美術館、システリーナ礼拝堂を、アシジでは聖フランチェスコ教会をメインに巡礼しました。聖フランチェスコ教会とアシジの美しい町は機会があつたら時間をとって訪ねたい場所だと思ひました。教会内に保管されている継ぎ接ぎだらけの聖フランチェスコの僧服を見ていると胸の底から熱いものが込み上げてきて、立ち尽くしてしまいました。

私は以前、聖フランシ

スコ・ザビエルの生家を巡礼したことがあります。何故に二人とも現世的に何ん自由なく過ごした青年期の生活と決別して、一人は異教徒の地の布教の道を、一人は従順と清貧と貞潔の道を極限まで徹底して生きる事ができたのだろう。私のイメージの世界にある二人の姿はどこかで十字架を背負い磔刑場へ向かうキリストの姿と二重写しになってしまいました。

今回の旅はミサと祈りのうちに終わりました。私は巡礼最後のミサで共同祈願の朗読の機会をいただきました。その中に「キリストに従う私たちが自分の思いにとらわれることなく、神の呼びかけに…」とあり、自分のために用意された共同祈願だと思ひながらたどたどしく読み終えました。